ソフィア
京都新聞文化会議

# 勝者敗者、誰もが努力の結晶

寶 馨氏

___644

たから・かおる　1957年生まれ。土木工学、水文学。京都大防災研究所所長を経て現職。京大在学中は硬式野球部で投手。監督を２度務め、現在は部長。関西学生野球連盟副会長も務めた。

球春来たる。本格的な野球シーズンだ。選抜高校野球の出場校も決まった。強豪と呼ばれ何回も全国大会に出場した高校もあれば、初出場で地元の期待が大きい高校もある。

寒冷地は野球に不利だった。冬の間十分な練習ができないからだ。ハンディキャップのある高校が全国大会に出てきたとき、応援したくなるのが人情というもの。判官びいきになってしまう。ところが近年、高校でもプロでも北国のチームが優勝するようになった。私は野球も地球温暖化現象だ、と冗談を言っている。

ハンディキャップのあるチームが強者に立ち向かう、努力の結果、勝者になる、その背後にはたゆまぬ努力と工夫がなされている。人々はそれに感動する。金メダルではなかったものの、前回リオ五輪の男子４００㍍リレーも極めて感動的だった。

近頃、国際舞台での日本人選手の活躍ぶりに目を見張る。昔は期待されながらも大抵は結果が出せず、勝負に弱いという印象があった。国際経験や指導者不足という理由も大きかったようである。世界のトップレベルで戦っている日本人選手の多くは、今でも外国人コーチの指導を受けている。

オリンピックは、何のために行うのであろうか。人類の限界に挑戦する大会とすれば、プロ選手が出場することも納得できる。アマチュアの最高峰を競う大会であろうか。その観点は薄れてきているようである。

１００年以上前に、当時の国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）会長クーベルタンは「参加することに意義がある」と言ったが、五輪の本大会に参加するにはたいへんな努力が必要である。アマチュアであっても相当な資金を要する現代では、参加すること自体が難しい。本大会に参加できただけでも幸せ、とも言える。

クーベルタンの言は、努力することの重要性を伝えることが真意であった。オリンピックの本大会、国内スポーツの全国大会に結果的に出られない敗者になったとしても、勝利を目指して懸命に努力することに意義がある、と言っているのである。

もちろん、勝者を継続することもたたえられねばならない。昔のプロ野球、最近の大学ラグビーでも９連覇があった。スピードスケートで三十何連勝もするような選手は、その素質もさることながら、たいへんな鍛錬の積み重ねと試合での集中力が必要であろう。

今年はラグビーのワールドカップ（Ｗ杯）がある。来年はいよいよ東京オリンピック・パラリンピックがやってくる。強者弱者、勝者敗者それぞれの努力の結晶を楽しみたいものである。（京都大学大学院総合生存学館長・教授）

バックナンバーは 京都新聞 ソフィア 検索

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社　無断複製・転載を禁じます